



現代日本文學大系

27

高村光太郎 集
宮澤賢治



筑摩書房

現代日本文學大系 27

昭和四十四年九月十五日

初版第一刷発行

昭和四十九年十月三十日

初版第六刷発行

高村光太郎・宮澤賢治集

著者

高村光太郎
宮澤賢治

発行者

井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京二九一七六五一

振替口座東京四一二二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

高村光太郎集 目次

巻頭写真
筆 蹟

道 程

「道程」以後

猛獣篇

「猛獣篇」時代

典 型

「典型」時代

オオギユスト ロダン

宮澤賢治集 目次

自分と詩との関係
智恵子の半生
父との関係
荻原守衛

二四
二五
二三
二七

三 四 四 四 四 三

春と修羅 第一集

二四

春と修羅 第二集

一七

よたかの星

二〇

どんぐりと山猫

二六

注文の多い料理店

二五

ポラーノの広場

二八

風の又三郎

二九

銀河鉄道の夜

三三

農民芸術概論綱要

三四

〔付録〕

高村光太郎

草野心平 二七

高村光太郎山居七年

―山に入るまで

佐藤隆房 三〇

わが生涯

高村光太郎 三九
高見順 三九

高村光太郎の回想

伊藤信吉 三五

宮沢賢治の童話の世界

寺田透 四七

詩人・宮沢賢治

山本太郎 四七

年譜

四七

著作目録

四五

高村光太郎集

万葉集の何多多野山
あのとひのこのが阿
ま隈川

荒不閑


道程

失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり

かの不思議なる微笑に銀の如き顫音を加へて
「よき人になれかし」と

とほく、はかなく、かなしげに

また、凱旋の將軍の夫人が偷視の如き

冷かにしてあたたかなる

銀の如き顫音を加へて

しづやかに、つつましやかに

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

深く被はれたる煤色の仮漆こそ

はれやかに解かれたれ

ながく画堂の壁に閉ぢられたる

頬ぶちこそは除かれたれ

敬虔の涙をたたへて

画布にむかひたる

迷ひふかき裏切者の画家こそはかなしけれ

ああ、画家こそははかなけれ
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

心弱く、痛ましけれど

手に権謀の力つよき

昼みれば淡緑に

夜みれば真紅なる

かのアレキサンドルの青玉の如き

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

我が魂を脅し

我が生の燃焼に油をそそぎし

モナ・リザの唇はなほ微笑せり

ねたましきかな

モナ・リザは涙をながさず

ただ東洋の真珠の如き

うるみある淡碧の齒をみせて微笑せり

頬ぶちを離れたる

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

かつてその不可思議に心をのき

逃亡を企てし我なれど

ああ、あやしきかな

歩み去るその後かげの慕はしさよ

幻の如く、又阿片を燻く烟の如く

消えなば、いかに悲しからむ

ああ、記念すべき霜月の末の日よ
モナ・リザは歩み去れり

生けるもの

何事も戯にして、何事も戯ならず

戯ならずと言はむにはあまりに幼し

戯なりと言はば自ら悲し

我も生けるものなり

公園に散る新聞紙の如く

貧く、あぢきなく、たよりなく

雨にうたるるまで

生けるものをして望むがままに生かしめよ

根付の国

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人

三五郎の彫つた根付の様な顔をして

魂をぬかれた様にぼかんとして

自分を知らない、こせこせした

命のやすい

見栄坊な

小さく固まつて、納まり返つた

猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、だ

ぼはぜの様な、麦魚の様な、鬼瓦の様な、

茶碗のかけらの様な日本人

画室の夜

暖炉カイロの火は消えて
 室の四すみよりいつとなく
 寒さは電流の如く忍び入る
 絹マントルの明るき光は瞬またきもせず
 物の色より黄を奪へり
 乱雑なる画室の様もの淋しさよ
 今もわが頭の中に微笑せる彼の人を思へば
 絵具と画布とは兎戯ウソに近し
 ——芸術は唯巧妙なる約束の因襲なるを——
 むしろシャヴヌの画を嗤わらつて
 一杯の酒サカベに泣かむとす
 寒さ烈し
 冬の夜の午前二時

熊の毛皮

熊の毛皮の心地よさよ
 なめらかに、さらさらと
 肌にふる

その長き毛に頬をうづめよ

その黒き毛に身をなげかけよ
 不思議なる歓樂は

血管を走る可し
 湯より出でたる女等を
 こころみに熊の毛皮に伏せしめよ
 美しきものは
 更に生きたる光を得む

熊の毛皮の心地よさよ
 なめらかに、さらさらと
 肌にふる

人形町

あの大丸も店仕舞をしたさうな
 角の尾張屋の
 大きなおろし小うり甘酒かんざうの行燈あんどんが
 いま百八つの鐘の鳴り止んで
 少しひつそりした
 人形町にまだ見える

おもひなしか掃除の出来た
 電車通りを帰つて来れば
 横町よこまちに古風な白張提灯しらはちまんとんがひよつこりと——
 何処かで鶏が啼く

甘栗

釜からあげた
 清国名産甘栗の
 やはらかい皮をむけば
 琥珀くわくの様な栗の実が
 ころころとこぼれたり
 ——みりんくさい湯気がちる——
 ワニラの酒ウヰイラウヰに似た
 舌つたるい甘さが
 鬼の息のやうに体を包んだ
 ——氣の遠くなるやうな南清の大河
 揚子江の岸の白楊に日があたる
 チャルメラの唄が
 とほく、とほく——
 よせば可いのに、その時
 ころげた栗の実を
 拾ひろつて拭ぬぐいて手にのせた
 お花さんのいたづら

庭の小鳥

——つうい、ちろちろ——

何の小鳥か庭に来て
めづらしい声に啼く

——つうい、ちろちろ——

流暢りゅうじやうなああの声きけば
日本の鳥ではないさうな

亡命者

わが心は蝕むしへり
うつろに、くろく、しんしんと
潮時来れば堪へがたし

かの亡命の日の淋しさに
身を隠したる家なれど
猫の背よりもうつくしき
黒髪をもつ少女等は
むざんなる力もて
ゐたりけり

女とは悪しきもの名なるかな
わがうつろなる心は
この名によりて痛し
女とはあやしきもの名なるかな
わがおびえたる心は

この名によりてをのけり

げに女こそ世にも悲しきものなれ
わがさびしき心は
この名によりて寂寥を極む
げに女こそ世にも呪ふべきものなれ
わがあたたかき心は
この名によりて、見よ凍らむとす

女よ

されど我に調伏の力なし
ただ衰れる俳優のごとく
人知れず、ものの陰より
しづやかに、しとやかに
何時いつとなく
舞台を去らざるべからず——

鳩

わが心は蝕むしへり
静かなる夜も、しんしんと
潮時来れば堪へがたし

鳩に豆やろ、豆くへ、鳩よ

鳩が豆くふ、親鳩子鳩

馴れて吾が手に豆くふ子鳩

観音堂に夕日がさせば

鳩を見てさへ泣いたもの

食後の酒

青白きガスマ瓦斯の光に輝きて
吾がベネヂクチンの静物画は
忘れられたる如く壁に懸れり

ピエツツエ
食器棚の鏡にはさまざまの酒の色と
さまざまの客の姿と
さまざまの食器とうつれり

流し来る月琴の調しらべは
幼くしてしかも悲し
かすかに胡弓こきうのひびきさへす

わが顔は熱し、吾が心は冷ゆ
辛き酒を再びわれにすすむる
マドモワゼル・ウメの腫うぶのふかさ

寂寥

赤き辞典に

葬列の歩調あり

火の気なき暖炉は

鉢山にひびく杜鵑の聲に耳かたむけ

力士小野川の嗟嘆は

よごれたる絨毯の花模様にひそめり

何者か来り

窓のすり硝子に、ひたひたと

隣をそそぐ、ひたひたと――

黄昏はこの時赤きインキを過ち流せり

何処にか走らざるべからず

走るべき処なし

何事か為さざるべからず

為すべき事なし

坐するに堪へず

脊迫は大地に満てり

いつしか我は白のフランネルに身を捲き
蒸風呂より出でたる困憊を心にいだいて
しきりに電磁学の原理を夢む

朱肉は塵埃に白けて

今日の仏滅の黒星を嗤ひ
晴雨計は今大擾乱を起しつづ
月は重量を失ひて海に浮べり

鶴香水は封筒に黙し

何処よりともなく、折檻に泣く

お酌の悲鳴きこゆ

ああ、走る可き道を教へよ

為すべき事を知らしめよ

水河の底は火の如くに痛し

痛し、痛し

声

止せ、止せ

みじんこ生活の都会が何だ

ピアノの鍵盤に腰かけた様な騒音と

固まりついたパレット面の様な混濁と

その中で泥水を飲みながら

朝と晩に追はれて

高ぶつた神経に顫へながらも

レツテルを貼つた武器に身を固めて

道を行く其の態は何だ

平原に來い

牛が居る

馬が居る

貴様一人や二人の生活には有り余る命の糧が
地面から湧いて出る

透きとほつた空気の味を食べてみる

そして静かに人間の生活といふものを考へろ

すべてを棄てて兎に角石狩の平原に來い

そんな隠退主義に耳をかすな

牛が居て、馬が居たら、どうするのだ

用心しろ

絵に画いた牛や馬は綺麗だが

生きた牛や馬は人間よりも不潔だぞ

命の糧は地面からばかり出るのぢやない

都会の路傍に堆く積んであるのを見ろ

そして人間の生活といふものを考へる前に

まづぢつと翫味しようと思ひろ

自然に向へ

人間を思ふよりも生きた者を先に思へ

自己の王国に主たれ

悪に背け

汝を生んだのは都会だ

都会が離れられると思ふか

人間は人間の為した事を尊重しろ

自然よりも人工に意味ある事を知れ

悪に面せよ

PARADIS ARTIFICIEL !

馬鹿

自ら害ふものよ

馬鹿

自ら卑しむるものよ

風

はるばると椿の多い三宅島から
油壺のやうな黒潮を超えて

いい心持に

氣随氣儘な八つ当りさへさんざ為て

はねて、けつて、とんで

とんで、躍つて

都へ渡つた南かぜ——

さればさ

茨の刺の青むと一緒に

通る女も、通る女も

みんな油くさくなつた

新緑の毒素

青くさき新緑の毒素は世に満てり

野といはず山といはず
街の垣根、路傍の草叢

置き忘れたる卓上の石の如き霸王樹に至るま
で

今は神経に動乱を起して

ひそかに廻る生の脈搏

狂ほしき命の力

止みがたき機能の覚醒に驚きつつ

溢れ出づる新緑を

その口より吐き出だしたり

青くさき新緑の毒素は世に満てり

生命の過剰

形を備へざる勢力

あかつき

鶏の触神をそそりて

世にも不思議なる

かの鶏鳴を吐かしむる力

ありとある媚薬

ありとある香料も

いまだ此の力の避けがたきに及ばず

青くさき新緑の毒素は世に満てり

その味ひは直ちに人の肌を刺し

そのかをりはたちまち人の血管を襲ひて

我は此の時心臓の眩く重圧に堪へず

しかも、何事か絶叫せざるべからざる喜悅と

驕慢と来れば

手は新しく物に触れ

足は雀躍してただ前進せむとす

——されば、されば

苦しき忘我と

たのしき疼痛とは

地殻より湧き出づる精液の放射

物のすべてに染み渡れるこの奇臭に因りて痛

まし

青くさき新緑の毒素は世に満てり

妊みたる瘦犬は共同墓地に潜みて病菌に歯を

鳴らし

蛇は安らかなる冬の眠よりめざめて

再び呪はれたる地上に腹這ひ嘆かざるべから

ず

二十日鼠は天井裏に交み

磯巾着は気味悪き擬手を動かす

ああ、禽獣虫魚

悉く無益なる性の昂奮に

虐殺と猜疑と狂奔とにいがみ合へり

青くさき新緑の毒素は世に満てり

見よ

河岸随一の醜女

樽屋のおちかは溜息して

まろき乳首をまさぐり泣けり

見よ

宗林寺の納所坊主

青瓢箪の妙円は朝の勤行に船をこぎ
門前の下駄屋に赤き鼻緒ををのき見つむ
見よ

大野屋の手代

四十男の佐太郎は

路地のくらやみに世にも始めて白鼠となれり
見よ

金庫を傾けて新しき紙幣の束を握り

上気したる青女房は素足も軽く

間夫の清人劉一章と広東に走れり
見よ、見よ、見よ

青くさき新緑の毒素は世に満てり

家に入れど

臥床に入れど

沐浴すれど

にがき胆をなむれど

三昧を聞けど

歌を聴けど

飲めど

泣けど

ともねすれど

まろねすれど

いづくまでも、いづくまでも

息ぐるしき辛辣のただよひは

我が身を包み、我が魂をとどろかす
あはれ、あはれ

青くさき新緑の毒素は世に満てり

廢頽者より

—— パアナアド・リイチ君に呈す ——

寛仁にして真摯なる友よ

わが敬愛するアングロサクソンの血族なる友
よ

君のあつき友情を思へば余は殆ど泣かむとす
めづらしき夕立の

チエルジイを襲ひて白き烟を上げたるかの日
余は初めて君の手を握れるなりき

寛仁にして真摯なる友よ

君は余に図り、余を信じて

運命の如く

遠きわが日本に何物をか慕ひ来れり

ああ、やがて其は三年にもなりなむ
友よ

君は常に燃ゆるが如き心を以て余に向へるに

余は狐の如く、また颯の如く

君の心を側に置きて

醜悪なる生活に身を匿せり

西に奔り、南に走せ、復りては又往きつつ

寛仁にして真摯なる友よ

君は静かなる深き瞳に物を思ひて

余の爲に悲しみたり
おのづから消えゆく写真のたよりなき悲しみ
の如く

落つる花の詮なきごとく

ゆく雲の止みがたきを思ふごとく——

桜さき、広重の水の流るる日本にして
友よ

君はいかに淋しかりけむ

君の結婚と愛児の誕生との間にも

君が眉のあたりに尚ほ何物か潜みたりき

君はつひに怒らず

またあきらむる事をせず

疲れたる余を見ては

チエルジイに於けるが如く今も語る

寛仁にして真摯なる友よ

君は知りつくし給ふならむ

余の悲しさの極まれるを

余の絶望と、余の反抗と

余の不満と、余の奮励との

つねに矛盾し、つねに争闘して
余を困憊せしめ

さらに寂しき涙に誘ひ行くを

余のまことに不倫なる自暴自棄の心をいだけ
るを

また理不尽なる難題に

解くべからざる結繩に

自らを苦しむるを

人として最も卑しき弱き心

直に極端を思ひ

ともすれば非常事に走する心の

余に藏れたるを

しかれどもまた

君は知りつくし給ふならむ

いかにして斯かるかを

寛仁にして真摯なる友よ

憤りは余に苛責を加へたり

ニルバナの花はあとを留めず

軒を見れども青き鳥は啼かず

君に故郷あり

余に故郷なし

余は選ばれたる試みの世界に

最も弱きものとして生れたり

余は、むしろ、余の贅沢に似たる苦痛

この我執ある懊惱を憎む

友よ

余を目して孤独を守る者となす事なかれ

余に転化は来るべし

恐ろしき改造は来るべし

何時なるを知らず

ただ明らかに余は清められむ

友よ

余は再びチエルジイに於けるが如く君の手を

握らむが為に祈る

「河内屋与兵衛」

夜が明けて眼がさめると

妹の薙若もほんのりと顔を上げる

大阪の油屋……

窓に日がさし

脚燈がためいきすれば

暗い見物は半ば口をあけ

咲きかけた睡蓮の心もちで黙つて見つめる

道具うらでとんと躑つまづく音

波紋のやうに静かな舞台の顫慄

さんたまりや

無頼の随一

河内屋与兵衛のあこがれこそ悲しけれ

丁髷太きどんふあんの眼こそ痛はしけれ

左団次の独白に銀の雨乱れかかり

魂ぬけてふうわりと

糸にひかるるや

長崎へ

くるりどの音さへ狂ほし

あれ、薙若も長崎へゆく

長崎へ

さんたまりや、さんたまりや

髪を洗ふ女

水道の水は止め度もなく

あの人の金使ひに似て流れる

洗粉の手ざはりつめた

返した人の後姿がなぜかしょんぼり気にかか

る

風呂にただよふ名も知れぬほのかな匂ひは

たよりないよな、あるやうな

ついこのごろの、されば、人のそぶりか

むしやくしや腹に髪を洗へば

髪さへ瘦せて櫛もすべりぬ

大河で鳴る汽船の笛が

ふいと消えればどうやら涙が

どうやら涙がにじみ出す

わが幻覚のあやしさを

浜町河岸の夏のあさ

「心中宵庚申」

死んでも去りは任りませぬと

立派に誓言しやつた仁左衛門が

あれ、去り状を書く

女房のお千代どのに――

ちつと囁みしめたふところ紙を落して
思はず驚く成駒屋の顔
梅雨の夜風が何処からか吹いて来て
ちよぼでは、わつと泣き落す

ふるい、ふるい人情の烈しいひかりが
もののかげから忍んで泣く
死ぬるは切ない美しさ
今の世でも

夏

夏になればじとじと
梅雨にしめつた夜具蒲団
桐の箆の着物から
モロツコ革の詩集まで
くわつと照り出す暑い日の
温気に蒸れて、それ、燐の香のする
青い、けうとい、ものものしい
微が這ひつき花が咲く

夏になればてらてらと
屋根の瓦が照り返し
入道雲も上せつつ
うろん臭げなうす笑ひ

物もうごかぬ真日昼に
いきり立つ水気の憎さ
やがてつもれば、どうせ不祥な
雷さまがわめき出す

夏になればすばすばと
ふかす煙草もあぢきなく
煙管なげ出しぢれついで
つい有り合ひの、処きはぬ難題に
男困らす人の癖
きりきりと囁む貝殻の
音がこたへて詮もなく
しん底夏には身をそがれる

そのまた夏が来るのかね

なまけもの

浅草は
雷門のよか様の昼のけうとさ
ひろびろと静かな二階の
白い食卓には斜に並木の新緑がしみ
栗色のリノリアムは足もとで微かな弾力にさ
さやき
狂った時計は六時を指す
霧島つつじの真赤なかけに

サツポロの泡をみつむる
マドモワゼルもねむたし
三階にだるい稽古の細棹
その糸につれてそつとうつ足拍子も
いつか止んでものみなねむたし

なまけものはベネヂクチンをなめて
過ぎゆく時のゆるやかなテンポをたのしみ
こころに基督の禁をやぶる
ぼんやりとした春の末
観音さまに程近い
美人料理の昼のけうとさ

さてもその時ふいと聞えるものの声
「雷門の定見世で
とんだりはねたり変つたり、やれな」

手

わが手を見ればうとまし
昨日病院の白き部屋に見たる
かの瓶詰の手と
さまで変らずなまなましきものを
手のみかは……

金秤

アルミニウムの金秤きんばかり

上二匁の分秤

風もないのにぢりぢりと

日がな一日ふるへては

休む瀬のない氣のくばり

白くまぶしいモルヒネが

ひらりと乗れば金秤

胴ふるひして身をたふす

夏のさ中にいぢらしい

アルミニウムの金秤

はかなごと

つい言ひ出したことはなけれど

言ひ出さねばわからぬものか

言ひ出さぬままに

いつしか過ぎぬれば

むかしの思おもひは夢のやうにて

唄のやうにて

ころろにかかつた名も知らぬなやみは

薄うすいほろろか、ほろりと取れける

さびしや

めくり暦

めくり暦のさびしさよ

昨日も今日も裂いて取る

あすもあさでも裂いて取る

裂いてつきればお正月

裂いてつきるはよけれど

かうして棄てた紙屑に

さてもよくよく似た女――

めくり暦のさびしさよ

地上のモナ・リザ

モナ・リザよ、モナ・リザよ

モナ・リザはとこしへに地を歩む事なかれ

石高く泥濘ぬじやうふかき道を行く

世の人人のみにくさよ

モナ・リザは山青く水白き

かの夢のごときロムバルディアの背景に

やはらかに腕を組み、ほのぼのと眼をあげて

ただ半身のみあらはせかし

思慮ふかき古への面聖もかくは描きたりき

現実に執したる全身を、ああ、モナ・リザよ、

示すなかれ

われはモナ・リザを恐る

地上に放たれ

ちまたに語り

汽車に乗りて走るモナ・リザを恐る

モナ・リザの不可思議は

仮象に入りて美しく輝き

咫尺に現じて痛ましく貴し

選択の運命はすでに余に余を棄てたり

余は今もただ頭をたれて

モナ・リザの美しき力を夢む

モナ・リザよ、モナ・リザよ

モナ・リザは永とこしへに地を歩むことなかれ

葛根湯

かれこれ今日も午といふのに

何処どことない家の中の暗さは眼さめず

格子戸の鈴は濡れそぼち

衣紋いもん竹はきのふのままにて

窓の外には雨が降る、あちら向いて雨がふる

すげない心持に絶間もなく――

町ぢやちらほら出水みづのうはさ狸ねこばやしのやうなものひびきが

耳の底をそそつて花やかな昔を語る

膝をくづして

だんまりの
銀杏返しが煎る葉
ふるい、悲しい、そこはかかない雨の香に
壁もなげいて息をつく
何か不可思議な
何か未練な湯気の立つ
葛根湯の浮かぬ味

夜半

白の毛布につつまれしギオロンセロは
あつくるしき其の低音に汗ばみ
油ぬりたる瓦斯の開閉器は
忍び出づるするどい臭気に色青ざめ
隣りの尨は気狂ひのごとく
くらやみの空に吠えかかる

下水に捨てし魚の腸の腐りゆけば
わが眼はねどこの中に病みつかれて
山椒のごとき昂奮に神経はののしる
むしあつき夜はじくじくと
痘瘡やみの乳牛のくるしみに似たり

ふとおそろしき欲望は筋肉をひきつり
電流に似たるやるせなき衝動は
胸ををどらせ
こころは謀計をめぐらして

にくき微笑をもらす

四十にちかきふとりじしのをんなは
絞らまほしき脂肪に銀いろのおしろいを塗り
あかごの首のごとき乳ぶさに
わきがのしほらしく
両あしを投げ出して
息なやましき若者の幻覚を責めさいなむ

七月の風なき夜半の
わが官能の泣きわらひ

けもの

けものををんなよ
限りのない渴望に落ちふけるをんなよ
盲人のしつこさを以てのしかかるをんなよ
海蛇のやうにきたならしく
ぬかるみのやうにいまはしいをんなよ
けれど、かなしや
お前をまたも見にゆくのは
さばかりお前がけものなるゆゑ
いまはしいゆゑ

あつき日

ぢりぢりと啼きかけてはまた
何か憚かる初生な小胆な油蟬

赤い斑点が大きな樫の木の葉に
寶石のやうな空の碧い深みに
まぶしい人の顔にすだれの奥に
氷屋の店に、まつかな斑点が
てらてらと、ぎらぎらと——
東京の場末の青物市場には玉葱がむせ返り
蟆子はたたれた馬の腹にすひつき
太陽は薄い板のやうなものにて
わが横面をびしりとうつ

肉からしみ出す汗をふいて
木の根に休めば石炭酸の冷笑ぞ気味わるき

父の顔

父の顔を粘土にてつくれば
かはたれ時の窓の下に
父の顔の悲しくさびしや